かささぎ 通信 第39号

2015年11月13日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年十月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年1月号初出の三作品を読みました。「沼」・「鈴」

今回読んだ二作品は、タイトルが一文字の漢字であるという点に特徴があります。それぞれ語の持つイメージと作品の内容が一致しているように感じました。

「沼」・・・森三郎

一年生の雄吉の近くに引っ越してきた一歳下の男の子・清ちゃんは、小児まひの後遺症で松葉杖にすがっていて、みんなの遊ぶのをうらやましそうに見ている子でした。雄吉は、清ちゃんと遊んでやりたい気もしますが、友達から馬鹿にされるのではないかと思ったり、清ちゃんのおかあさんからお菓子をもらいたいためだと思われるのはいやだと考えたりしていました。清ちゃんの家の前を通ることをさけて、清ちゃんとは遊ぶこともないまま過ごしますが、ある日、清ちゃんの突然の死という事実を知ります。その後、清ちゃんのいた家の近くの沼で遊んでいると、いつか清ちゃんの家の上り口に転がっていたビロードの熊のおもちゃを見つけます。雄吉は清ちゃんと一緒に遊んでやらなかったことが、とても悪いことだったような気がしました。

十月の「読む会」では、この作品の読後感として、何かすっきりしないという声が上がりました。それはこの「ビロードの熊」の扱いでした。雨にさらされたのか、色も褪せて形もくずれたこの熊を、雄吉は足でけって沼へ落とすところで話が終わっているからです。悪いことをしたなという思いを、せめて忘れ去られた熊を大事に持ち帰る行為として示すことはできなかったのかという感想もありました。一方で、清ちゃんのことをかわいそうだと思いながら、実際は何もしなかったという事実を消し去りたいという気持ちが、熊の人形を沼へけり落とすという行為になったのだと考えられるという意見も出ました。タイトルの「沼」という不気味なイメージが、雄吉の気持ちを象徴しているかのようです。

『赤い鳥』昭和9年2月号の「講話　通信」で、鈴木三重吉は前号の童話「激戦」（＊坪田譲治）」や「沼」は稀に見る傑作として非常な好評でした。

と書いています。日常の生活風景を切り取りながら、子どもの心のひだを描いた点を、三重吉は評価しているのでしょうか。

「沼」の中には祭で大名行列が出る話があり、雄吉がその年のお殿様に選ばれて駕籠で揺られる場面があります。刈谷の大名行列が下敷になっていると思われます。

「鈴」・・・江口謙

虫歯が痛んで歯医者さんに行く四歳の良一の日常を扱った童話です。帰りにごほうびに汽車を買ってもらう約束でした。しかし、良一はじいやから猫柳を「猫の卵」だと教わったので、汽車の代わりに、たくさん生まれてくるはずの小猫たちにつけてやる「鈴」を買ってもらいます。タイトルの「鈴」の音と、子どもの無邪気な様子との取り合わせがかわいらしいという感想が出されました。

お稲荷さんの初午の日の縁日でおもちゃを買ってもらう場面もいきいき描かれています。

この童話の載った『赤い鳥』昭和9年1月号、2月号の「講話通信」で鈴木三重吉は『赤い鳥』の特徴であった「幼年童話」の創作を呼び掛けています。「鈴」はそういう三重吉の考えに即した題材選びだったのかもしれません。

次回予定　12月11日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年3月号初出作品

「角兵衛獅子」、「ピアノ」（「夜長物語」所収）